

1 研究主題

「生き生きと学び、確かな学力を身につける児童の育成」

～伝え合う活動を取り入れた学習を通して～

2 主題設定の理由

（１）学校教育目標の具現化から

本校では、「かしこく やさしく たくましい 小淵の子」を学校教育目標に掲げ、目指す児童像として、「自尊感情の高い子」を設定し、「進んで学び 自分を高めようとする子」「思いやりの心もち 素直で明るい子」「心身を鍛え ねばり強くやりぬく子」の育成を目指している。そのためには、本年度の指導重点項目の中の「かしこく（確かな学び）」のための「授業の充実」「基礎的・基本的な知識及び技能の習得」「言語活動の充実」「家庭学習の形成」などがなされたときに具現化されるものと考えている。

学習指導要領では、国語科はもとより、国語科以外の各教科等の授業においても言語活動を充実させることを求めている。児童に「生きる力」をはぐくみ、確かな学力を形成する際に、子どもの言語活動を重視していくことが謳われている。このことは、言語活動を単に国語科だけでなく、全教育活動を通して、すなわち各教科等の学習活動において言語活動を充実させることが求められている。

各教科等の指導において、言語活動を図ることにより、言語に対する関心や理解、能力を身につけることによって、子どもの思考力、判断力、表現力等の能力を育成することを目指す。こうした授業実践を繰り返すことによって、目指す児童像の具現化、ひいては学校教育目標の具現化がなされるものとする。

（２）昨年度までの研究から

本校では、平成19年度から3年間山梨県教育委員会の「確かな学力ステップアップ事業」の実践検証校の指定を受けていた。「確かな学力ステップアップ事業」は、「基礎学力向上やまなしプラン(H14～H16)」「学びの意欲向上推進事業(H17～H18)」を継承するものであり、「全国学力・学習状況調査を始めとする客観的なデータに基づいて児童生徒の学力や学習の状況を把握し、その改善に向けての具体的な対策を通して、すべての児童生徒の確かな学力の定着と向上を図ること」を目的としていた。その研究の内容・方法は次の通りである。

①自校の全国学力・学習状況調査結果を分析して傾向及び課題を把握し、検証改善委員会作成の『結果改善のための手引き』等を参考に、「授業改善プラン」を策定する。②「授業改善プラン」に基づいた授業実践を行い、プランの効果を検証する。③検証を基にプランに検討を加え、修正すべきは修正した上で、授業実践を行う。④「②③」を繰り返し、検証改善サイクルを確立する。つまり、「学力向上を目的としたPDCAサイクルの導入」という研究手法である。19年度・20年度・21年度ともに、「全国学力・学習状況調査」のデータ受け取り後、直ちに結果を分析し、本校の傾向（成果及び課題）を把握して、「授業改善プラン」を作成した。これらのプランを、随時、授業で実践し、その有用性を検証して改善点を探りつつ、検証改善サイクルを確立してきた。そして、平成21年6月26日に公開研究発表会を開催、

研究の成果を発表し、研究指定校の役目を果たした。

平成23年度からは国語科に絞り、三年間の実践を積んできた。今までの研究を継続・発展させ、効果的な言語活動を取り入れた授業実践を中心に研究を進めた。学力テスト等から「授業改善プラン」を作成することに固執せず、学力テストやアンケート・授業観察やスモールテストなど多面的に児童の実態を把握するとともに、それらを基に、より効果的な言語活動を取り入れた授業を求めて研究することが必要であることがわかってきた。また、基礎的・基本的な知識・技能を活用し、お互いの考えを交流する「学び合いの場」を通して、自分の考えを見つめ直し、さらに深めたり広げたりする授業を実践していくことが、児童の論理的思考力を高めることにつながってきた。さらに、児童一人ひとりの目標やねらいの達成状況を見取るための評価についても研究を継続してきた。国語科において自分の考えを文章に書き表したり、友達に伝えたりすることによって、言語能力の向上を図る授業の創造を図ってきた。そうした授業を意識して仕組んでいくことで、書くことへの抵抗がなくなってきた児童や、自分の考えを人に伝えることで思考が深まっていく姿を目の当たりにすることができたことは大きな成果であった。同時に、国語科での力を他教科においても培っていくことの必要性を感じてきた。

平成26年度からは、各教科の特性に基づいた言語活動の充実を図るとともに、基礎的・基本的な知識や技能を活用することで思考力・判断力・表現力を育んでいくことを目指してきた。具体的には、国語科に限らず、各教科においての基礎的・基本的な知識・技能の習得と、より効果的な言語活動を取り入れた授業の創造を探る研究に取り組んできた。また、昨年度は、書く活動に重点をおき、研究を進めることにより児童の書くことに対する抵抗が少なくなり、確実に力もついてきた。

この二年間は、NIE実践指定校を受け、授業の中で新聞を活用することにより、児童の思考力・判断力・表現力等を育む手段として授業の中で効果的に取り入れようと確認し、実践を行ってきた。

その一方で、近年の学力調査や諸調査等から、「自分自身の考えを明らかにし、その根拠となる事柄を説明する活動を意欲的に取り入れていくこと」や「考えの根拠をもちながら、わかりやすく伝えるための手立てや場面を多く設けるようにする」という課題もみられた。

そこで今年度は、昨年度の書く活動で培ってきた力をもとにして、「根拠をもって自分の考えを伝え合うことができる」児童を育成するために、各教科等の指導において言語活動を充実させ、言語に関する能力を育てていくことをねらいとしたい。そのことで、子どもたちの学力を構成する重要な要素である思考力・判断力・表現力等の力を、さらに育んでいくことにつながっていくと考える。

(3) 児童の実態から

本校の児童は、総じて素直であり、何事にも一生懸命に取り組む様子が見られる。授業や宿題についても地道に取り組む姿勢が身につけている児童が多い。また、各種学力調査の結果から、全国や県の平均を上回る学力を有しているといえる。しかし、その一方で一定時間集中して話を聞いたり学習を進めたりすることができない児童がみられ、「がまんしてやりぬく」「集中して取り組む」態度の育成が課題として挙げられる。

また、本校児童は与えられた課題に対して答えを求めることはできるが、その根拠や答えを導くまでの過程を発達段階に応じて論理的に表現することが苦手であるという課題も挙げられてきた。さらに、書いてあることを読んで一方的に伝えることはできるが、相手の意見を受けてさらに自分の考えを伝えることについては消極的であるように感じる。

そこで、今年度は子ども自身の学びや思考過程を明らかにした上で、自分の考えを表現し、さらに相手の意見を聞くことで自分の思考を広げていくような「伝え合う」活動に焦点を当てて研究を行っていきたい。「自分の考えを伝え合う」ためには、まず自分の考えをまとめて書くことやそれをもとに相手に伝えること、さらに相手の意見をしっかりと聞き、その上で自分の考えを再構築し相手に伝えることが必要になってくる。つまり「書く」「話す」「聞く」の三つの学習活動が不可欠になる。これまで行ってきたような学び合いの場面を取り入れたり、発達段階に応じた話型を活用したりすることにより互いの考えを根拠も入れながら伝え合うことができるような授業形態の構築を図っていきたいと考える。伝え合う活動を通して、根拠を持って自分の考えをまとめたり友達の考えを受けて自分の考えを再構築したりする思考力、多様な考えや情報を分析したり選択したりすることができる判断力、自分の考えを根拠をもって分かりやすく伝えることができる表現力を養っていくようにしていきたい。また、ICT機器も、児童の考えを分かりやすく伝えることができるツールとして有効に活用できるようにしていきたい。

(4) 今日の課題から

学習指導要領が求める生きる力とは、「確かな学力」「豊かな心」「健やかな体」の育成によってはぐくまれるものである。その中でも、「確かな学力」を育成するために、創意工夫を生かした特色ある教育活動を展開する中で、基礎的・基本的な知識及び技能を確実に習得させ、これらを活用して課題を解決するために必要な思考力、判断力、表現力等、論理的思考力をはぐくむことが求められている。その際、言語活動を充実するように配慮しなければならない。

また、平成20年の中央教育審議会答申においても、授業において、思考力、判断力、表現力などの能力を育てるために、言語活動を充実させていくことは、次の視点から必要であることがあげられている。

- ①体験から感じ取ったことを表現する
- ②事実を正確に理解し伝達する
- ③概念・法則・意図などを解釈し、説明したり活用したりする
- ④情報を分析・評価し、論述する
- ⑤課題について、構想を立て実践し、評価・改善する
- ⑥互いの考えを伝え合い、自らの考えや集団の考えを発展させる

言語活動は、各教科等で求められている固有の目標や内容を身につけさせるための手段であり、活動である。各教科の授業において、言語活動を取り入れ充実させることや、言語に関するさまざまな能力を育てていくことは、子どもたちの学力を構成している重要な要素となる、思考力、判断力、表現力などの能力を育むために必要である。

学習指導要領が唱える生きる力をはぐくむことは今日的な課題であり、そのためには、児童の言語活動を充実させ、「確かな学力」を育成していかなければならない。いわゆる知識基盤

社会といわれる変動の激しい現代社会をたくましく生きていくために生きる力は必要不可欠な教育課題である。児童の「生きる力」をはぐくむためにも本主題を設定した。

また、近年、育成すべき資質・能力を育むための課題の発見・解決に向けた主体的・協働的な学びであるアクティブ・ラーニングについても重視されるようになってきている。アクティブ・ラーニングの方法例としては、発見学習・問題解決的学習・体験学習・調査学習・グループディスカッション・ディベート・グループワークなどが挙げられている。そのような活動を行う際にも自分の考えを根拠と共に互いに伝え合うことができるスキルが求められるのではないかと考える。

児童の「生きる力」を育むことや主体的・協働的な学びができるようになることを考え、本主題を設定した。

3 研究仮説

「伝え合う」活動を効果的に授業に取り入れることにより、児童は根拠を持って自分の考えを持ち、互いに考えを交流し、思考力・判断力・表現力等が高まるであろう。

4 研究内容

(1) 授業研究部会

①思考力・判断力・表現力等を高めるために「伝え合う」活動を取り入れた有効な指導過程の構築を図る。(一人一実践・研究授業)

ア 年間活動計画の見通しのもと、その単元でどの指導事項を取り上げるのか、児童の実態に即して、どの指導事項のどこに重点を置くのかを明確にする。そのうえで、そのような能力を育成するのに最適な言語活動を、「言語活動の充実に関する指導事例集」(文部科学省)等を参考にして授業実践する。その際には、授業の中で「伝え合う」活動を入れるようにする。

イ 授業の中で学び合いを行う形態や話し方・聞き方についての基本、発達段階に応じた話型について研究を行う。

ウ 国語科における「話し合い」の各学年の内容を洗い出し、指導へと生かしていく。その際には、学年で児童にどこまで身につけさせるのかを明確にしておく。

エ ICT機器を使った授業について研究を行い、積極的に活用できるように力量を高める。

オ 「一人一実践」の取り組み

県下小中学校の教員が、担任している学級や担当している教科の授業の振り返りと児童生徒の学力状況の把握から授業のあり方を見つめ直し、児童生徒の更なる学力の向上を図るために「授業改善プラン」を参考にしつつ、授業を深化・改善する。

②児童へのアンケートや学習評価を工夫することにより、設定した言語活動をとおして目標

やねらい及び論理的思考力が高まったかどうかを具体的に把握できるようにする。

（２）学習環境整備部会

- ①言語環境の整備をする。（学年に応じた掲示物の作成等）
- ②学年の活動の様子がわかるような掲示物を作成する。
- ③お便りによる保健安全や食育，読書教育の啓発活動をする。
- ④脳トレコーナーなどを作り，児童の興味関心の向上に努める。

（３）確かな学力を育成する手立てを取り入れた日常的な実践

☆学習全般

- ・家庭学習の工夫
- ・家庭学習取り組み週間の設定
- ・学び合う場の設定（ペア・少人数・全体）
- ・朝学習の充実
- ・朝の会や帰りの会でのスピーチ
- ・基礎的な知識・技能を明確にし，確実に定着させる指導
- ・習得した知識・技能を活用する場面を設定した授業

☆国語科

- ・話し合う活動の日常化
- ・語彙を増やすための辞書の活用

☆算数科

- ・問題解決型の学習
- ・問題を解決する過程における伝え合う活動
- ・ホワイトボードの活用

☆特別活動

- ・学級会における話し合い活動の工夫

（４）学力向上プロジェクト

- ・一人一実践
授業を公開し，行ける人は誰でも行けるようにし，授業実践を見て互いに学び合う。
- ・一校一実践

（５）その他

- ・特別支援教育学習会
- ・教育課程説明会還流報告会
- ・全国学力状況調査や県の学力調査の分析，結果報告
- ・外国語活動，道徳等 各種研修還流研修 等